

# 先住民の視点から災害を見る

前回(2026年1月号)は、文化人類学という視点から災害研究を行うことについて、先行研究を引用しながら、その特徴について紹介した。それは、まず災害を単なる自然環境や人が手を加えた環境に由来する破壊を起こす素因/力の作用として捉えるのではなく、むしろ社会的、経済的脆弱性の状況下にいる人間集団と結びついて生じる事象として捉えることである。さらに、災害を社会的機構の本質である親族関係やその他の協力関係の紐帯やレジリエンスを明るみにするものと捉えることで、災害における諸集団の力関係や脆弱性を解明できる機会であると認識することである。

## 八八水害の概要

筆者が研究対象として取り上げる八八水害とは、2009年8月6日から8月10日にかけて台湾の中南部および南東部で発生した水害である。この水害は、台風8号が台湾を横断した日である8月8日にちなんで八八水災と呼ばれ、国際的な台風のアジア名であるモーラコット(莫拉克)からモーラコット風災とも呼ばれている。この台風は1959年に発生した八七水害以降で最も被害の大きな水害となり、台湾各地で洪水、土砂災害を引き起こした。南部の高雄県甲仙郷(現在の高雄市甲仙区)では、小林村という集落が土砂災害により壊滅的打撃を受け、474人が生き埋めとなり、命を落とした。

この水害により台湾全土で681人が死亡したほか18人が行方不明に上るとともに、政府の救援対応や復興支援に対する批判が広がり、当時の馬英九総統率いる中国国民党政権に対する評価が急降下、政治的責任の追及を受けた劉兆玄行政院長(内閣総理大臣に相当)が同年9月に辞意を表明するまでに至った。

この災害の事前対応と災害発生時の緊急対応に対する批判として、当時次のことが指摘されていた。すなわち、台風という事前にある程度予測できる災害に対して、国軍を事前に被害が想定される中南部の山間部などに配置するなどの事前準備が十分にできなかったこと、また台風が接近した際に、いち早く避難勧告などを発令し平地など安全な場所に避難させなかったこと、さらには、多くの人命が失われた小林村の場合、緊急時の避難場所に指定されていた避難所が深層崩壊によって土砂に埋まってしまう状況となったことである。特に小林村については、指定された避難場所が適切だったのかという点に対して厳しく追及された。そのほか、このような事前対応が不十分だったことから、災害発生後の救助や避難所での生活物資が遅れたことについても、被災者から不満が噴出し、連日マスメディアで報じられ、政府は対応に追われた。

災害後の緊急避難が一段落し、生活再建に向けた災害復興が進められることになったが、今度は生活再建の場所をめぐる問題が大きな社会問題となった。これは、災害後に政府が国土安全評価を実施し、地質学者や土木の専門家などからなる調査チームによって被災地の安全評価を行い、原則として危険と評価された被災地では生活再建を認めないとしたからである。

災害が発生してまもない段階で、しかも被災者が避難所での不安定な生活を余儀なくされている状況においては、被害者不

在のまま、政府による安全評価が実施されて災害後に居住する場所が決定されることに、大きな不安と不満が募っていった。

実際にこの評価により、危険とされた台湾南部の高雄県桃源郷の先住民村落である勤和村では、危険だという評価に対して批判する住民が多かった。当時この村の村長であったブヌン族の長老は、災害後ようやくヘリコプターで集落を見たとき、多くの家屋が崩れずに残っており、元の集落で復興できると思ったと筆者に語った。

安全なのか、危険なのか。生活再建が許されないほど危険なのか。このような評価をめぐっては、人々の視点や社会的背景、知識、力関係なども影響するので判断が難しい。専門家たちは自らの専門的知識に基づいて、科学的、客観的に評価したと自負している。しかしながら、政府の決定過程や評価する専門家チームの人选や構成については、さまざまな意見が生じるだろう。ただ、ここで重要なことは、被災地の安全評価に対して当事者である被災者が納得しなかったという点である。政府は、自ら危険と指定した地域の住民を平地に建設する復興住宅に入居させるという復興計画を立てていたが、このような状況の中ではスムーズに進めることはできなかった。

## 先住民の視点から何が見えるのか

では、なぜこの村落の被災者をはじめ、多くの先住民が危険だという安全評価に納得しなかったのか。筆者の聞き取り調査から分かったことは、そもそも安全という認識に大きなズレが生じていること、また村落の先住民が抱く安全という評価の根拠は専門家たちのそれと大きく異なっているということである。

上記のブヌン族の長老は、「安全かどうかと聞かれれば、明らかに村落の側を流れる川床に土砂が堆積し、水位が上昇すれば浸水などの被害をもたらすかもしれないが、そのようなことが発生するのは雨季に限られており、私たちは高台にある自分たちの農地に避難できる」と言うのである。また別のブヌン族の女性は、「私たちは先祖からずっと山地に住んでいて、山での生活に慣れている。山で生活する知恵や能力も持っている。実際に、自分たちが使っている水は、自分たちで山で水源を見つけ、そこから水を引いているのである。こんなことは平地の人々(漢人)にはできないだろう」と誇らしげに筆者に語るのである。

先住民にとって、安全か危険かは自分たちの知恵や能力で生きられるかどうかという山地で長年培われてきた知恵や実践によって裏付けられたものである。科学的、客観的に専門家たちによって下される評価を現地の被災者がどのように受け止めるかは、現地の人々の文化的背景やこれまでの歴史経験を考慮していくべきではないだろうか。

## [参考文献]

スザンナ・M・ホフマン/アンソニー・オリヴァー＝スミス  
(2006)『災害の人類学—カタストロフィと文化』明石書店。  
山西弘朗(2026)「災害と原住民族」、日本順益台湾原住民研究会編『新編 台湾原住民研究への招待』風響社、293～297頁。